

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2013年度研究成果報告書**

|                   |                                       |                |                                  |       |
|-------------------|---------------------------------------|----------------|----------------------------------|-------|
| <b>研究科名</b>       | 立教大学大学院 社会学                           | 研究科            | 社会学                              | 専攻    |
| <b>研究代表者</b>      | 在籍研究科・専攻・学年                           | 氏名             |                                  |       |
|                   | 社会学研究科社会学専攻<br>博士課程前期課程2年             | 梶原はづき 印        |                                  |       |
| <b>指導教員</b>       | 所属・職名                                 | 氏名             |                                  |       |
|                   | 社会学部・教授                               | 木下康仁 印         |                                  |       |
| <b>自然・人文・社会の別</b> | 自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会 | <b>個人・共同の別</b> | <input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 | 名     |
| <b>研究課題名</b>      | 災害時における人と動物 - ゆらぐ援助の枠組みとこれから -        |                |                                  |       |
| <b>研究組織</b>       | 在籍研究科・専攻・学年                           | 氏名             |                                  |       |
|                   | 社会学研究科社会学専攻<br>博士課程前期課程2年             | 梶原はづき          |                                  |       |
| <b>研究期間</b>       | 2013 年度                               |                |                                  |       |
| <b>研究経費</b>       | (支出金額)                                | 200千円          | ／ (採択金額)                         | 200千円 |

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

日本の約4割の家庭が何らかのペット(コンパニオン・アニマル)を飼っている現在、災害時のペットの救助、その後の保護政策は重要な公衆衛生上の問題になっている。本研究は、東日本大震災後に人と動物を支援しているボランティアや専門職の経験とはどのようなものであるかを、質的研究の手法を使って明らかにし、行政と民間の支援の間で生じるコンフリクトに注目しつつ、今後どのようなソーシャル・サポートが必要かを探索しようとするものである。また近い将来起きる可能性のある大規模地震災害において、人と動物の避難計画構築に有益な知見を提供することを目指す。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ペット] [ボランティア] [災害]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**1 問題の背景**

社会学の分野では、近年、ボランティア研究、災害後のソーシャル・サポートは多くの研究者の関心を集めている。特に東日本大震災から3年が過ぎた今、現地の人々の経験を蒐集、記録し、様々な分野のアーカイブを作っていくことは、社会学が担っていくべき役割である。今回の東日本大震災で明らかになったように、災害時には行政はまず人命を救うことにマンパワーを割くため、ペットや家畜は後回しになる。置き去りにされた動物たちを救助、保護するため、またペットと避難した飼い主を支援するためにはボランティアを活用する以外方法はないが、その連携はどのようになされてきたのか、あるいはなされなかったのか。ペットのために活動するボランティアの質的研究は全くといっていいほど行われてこなかった。本研究では関係者21名へのインタビューと参与観察、関係資料の分析を行い、今後の動物と飼い主への支援のあり方を探索する。

**2 調査概要**

当初はボランティアへのインタビューのみを予定していたが、調査を始めてから、共に支援の場で働く獣医師の経験や、被災者がその支援をどう受け止めているのかも知る必要があると考え、結果的にさまざまな関係者21名に1時間半~2時間の半構造化インタビューを行った。許可を得て録音したデータを逐語的にテキスト化(テープ起こし)した。(うち予定外にインタビューできることになった2名はフィールドノートのみ)インタビューの前に、各調査協力者に研究内容を説明し、同意書にサインをもらった。説明の際には、いつでも調査協力を辞められる自由があること、匿名性の確保を口頭でも再度確認した。同意書は2部作成し、お互いに一部ずつ保管している。当該助成期間内に、宮城県で5回、福島県で1回フィールド調査を行った。さらに助成期間の前後にも宮城県で2回、福島県で1回調査をしている。

**2.1 ボランティア、獣医師等、計9名へのインタビュー**

宮城県では、ボランティア4名、仙台市動物管理センターの獣医師1名、ペットの美容院経営者1名にインタビューした。ボランティアの内訳は、宮城県北部で犬と猫の保護活動をしている民間のボランティア3名、仙台市の仮設住宅で飼い主への支援を市と協働で行っているNPO法人のボランティア1名であった。ペットの美容院経営者に話を聞いたのは、被災地域で飼い主やペットの事情をよく知る人物から、背景情報を収集するためである。福島県ではボランティア2名、田村郡三春町にある動物収容施設(シェルター)の獣医師1名にインタビューした。ボランティアの内訳は、シェルターで動物の世話をしている1名、避難指示解除準備区域に置き去りにされているペットへの給餌と去勢避妊手術の活動をしている1名である。

**2.2 被災者12名へのインタビュー**

宮城県仙台市に住みペットと被災した方12名にインタビューした。被災者の内訳は、現在も仙台市のA、B2つの仮設住宅に住んでいる11名、被災後東京に移り住んだ1名である。

**2.3 参与観察**

宮城県では、仮設住宅に行くたび、なるべく夕方の犬の散歩の時間まで滞在し、広場に置いてあるベンチに座って散歩の様子や、犬を含めた居住者の交流を参与観察した。また、A仮設住宅では、夏祭りに参加させていただいた。B仮設住宅では毎週集会所で行われているカラオケの会や、市の職員が退職する際の送別会に参加させていただいた。福島県では、福島県田村郡三原町の福島県動物救護本部が管理・運営するアニマルシェルターで参与観察を行った。また双葉郡葛尾村でペットへの給餌活動、新白河の避妊去勢専門クリニックでの被災動物の避妊去勢手術活動に参加し、参与観察を行った。随時気がついたことをフィールドノートに記録した。

**2.4 行政の発表資料分析**

行政が発行した報告書、ホームページを精査し、動物支援に対する枠組みが、ボランティア、被災者とどのように同じであり、違っているのかを考察した。

例えば

仙台市, 2013, 『東日本大震災 仙台市震災記録誌—発災から1年間の記録—』

環境省, 2013, 『東日本大震災における被災動物対応記録集』環境省自然環境局総務課動物愛護管理室

仙台市ホームページ 仙台市動物愛護行政の基本指針

[http://www.city.sendai.jp/dobutsu/1195266\\_2708.html](http://www.city.sendai.jp/dobutsu/1195266_2708.html)

## 研究成果の概要 つづき

### 3 考察

#### 3.1 ボランティアの経験—行政との連携

あるボランティアは「獣医師会が作った動物シェルターは半年で閉鎖され、その後も保護された動物が保健所から何とか預かってと持ち込まれる」と、仕事の「押しつけられ感」を語っている。獣医師側の事情を聞けば、自分の動物病院の経営もしながらのボランティア活動をそんなに長く続けていられないということもあるし、殺処分を減らしたいが里親（新たな飼い主）探しをする人手もノウハウもない行政はやはり地元のボランティアに頼らざるを得ない状況もある。震災から3年がたち、資金援助もなくなってきた中で、このまま活動を続けていけるか、不安を抱えながらボランティアは活動していた。

しかし、仙台市のNPO法人Aのボランティアは、震災前から仙台市動物管理センターと協働して、遺棄された動物に新しい家庭を見つける活動をしており、震災後もその普段の活動をそのまま拡大する形で行っただけだと語っている（もちろん、避難所、仮設住宅でペットの支援など新たな仕事も震災直後はあったが）。災害が起きて突然ボランティアと行政が連携をとって活動するには無理がある。信頼関係の構築のためには、災害が起きる前から、行政と地元のボランティアは情報を共有し、協働する必要があることが示唆された。

#### 3.2 被災者の経験

通常の時であれば、「ペットは家族の一員」という認識は、ある程度社会の中に広がっており、許容されている。しかし、災害時にその「家族の一員」であるペットと同行避難することは、非常に困難であった。2011年3月11日の地震発生と津波の混乱の中で、ペットを置いてこざるを得なかった人もいれば、避難所にペットを連れて行っただが入ってもらえなかった人も多かった。本研究では、自分と暮らすコンパニオン・アニマル（ペット）を生活の中で最も優先する価値観を「コンパニオン・アニマルファースト（Companion Animal First、以下CAF）」と定義した。ペットと避難した飼い主たちは、避難所で閉め出されるという突然の排除、周辺化を、またペットを亡くした飼い主は周囲の人から悲しみを理解されない経験をした。これらの、言わばCAFの価値観の危機に対し、彼らは以下の4つの応答をした。

**1<抗する>** 避難所でペットを拒否された人たちは、避難所の外の車で、あるいは避難所の廊下で、自分たちにとってペットは家族の一員であることを示し続けた。

**2<潜る>** また別の人たちは、全壊した家にペットと共に居続けた。避難所という、公的な仕組みの中にペットの居場所がなかったからである。

**3<かわす>** ペットとその飼い主にとって最も困難が大きかった災害直後の混乱を、親戚という社会関係資本を利用することでかわした人たちもいた。

**4<閉じる>** ペットを亡くしたインタビューイは、わかってくれない人には話さないという沈黙の戦略をとった。ただしある人は、遠方からボランティアたちと悲しみをわかちあう経験もした。

### 4 結論

本研究でインタビューした、動物のために活動するボランティアの多くは、金銭的にも、肉体的にも、過酷な条件の中でまさに身を削って活動していた。行政との、またボランティア団体同士の、情報共有、意思疎通が少ないことが、さらに孤立感を増していた。災害が起きてから混乱の中で信頼関係を構築するのは困難であることは当然であり、仙台市のような平時からの協働が重要であることが示唆された。

災害時の避難やその後の復興において、支配的な価値観は、人間中心、人命優先だった。一方、動物レスキューのため被災地に行ったボランティアや専門家による動物愛護の観点からの活動は、どうしても動物の命や生活の質を中心に考えてのものになる。確かに、ペットを一時、動物専用のシェルターに預かって混乱をやり過ごすことは、管理のしやすさから言っても、また動物の生存率を上げるためにも、有効である。ただし、CAFの価値観をもつ飼い主たちは、自分のQOL（生活の質）を犠牲にしてでも一緒に助かったペットを決して手放さないこともわかった。シェルターワークを自明のこととした現在の援助の枠組みだけでは、解決できない問題も残る。災害時の動物ボランティア、そしてCAFの価値観をもつ飼い主たちへの理解をさらに深めることは、災害時の避難計画構築や、災害後の復興計画にも寄与する有益な知見であると考えられる。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④その他

研究報告書

梶原はづき, 2014, 「災害をコンパニオン・アニマルと共に生き抜く一仮設住宅でのインタビューから」 『震災後の人の移動における「他者」との出会い・葛藤・受容にかんするコミュニケーション社会学的研究』 2011年度 日本経済研究センター研究奨励金 報告書 (研究代表者 奥村隆)

学会発表

梶原はづき 「Surviving with Companion Animal on the Great East Japan Earthquake : Owner's Strategy to Reconstruct Pet Community」 ISAZ 2014 Conference, 23rd Annual Conference of the International Society of Anthrozoology, ポスター発表、2014年7月19日～22日、ウィーン大学、オーストリア